

産教連通信

技術教育と家庭科教育のニューズレター

産業教育研究連盟発行
http://www.sankyoren.com

目次

□ 今夏の研究会はどうなるか	1
□ 実践記録「竹トンボと小刀」	奥住 實	2
□ エッセイ「産教連の思い出」	清原みさ子	6
□ 報告「小説の中の薫打ちと菰編み」	藤木 勝	8
□ 連載「農園だより(57)」	赤木俊雄	12
□ 会員からの便り紹介	14
□ 編集部ならびに事務局から	16

□ 今夏の研究会はどうなるか

新型コロナウイルス感染による患者の発生が中国の武漢で報告されてから早くも2年が経過しました。この間に開発されたワクチンの接種が進み、ウイルスの感染は収束に向かうと見られていました。ところが、世界各地で新たな変異株が出現したため、ウイルス感染者が再び急増しています。ウイルスの感染拡大はまだしばらく続くものと思われます。

昨年(2021年)夏の連盟総会で決定した新たな活動計画(前号をご覧ください)を具体化すべく、過日、常任委員会を開催して検討しました。その概要はおよそ次のようなものです。

交流研究集会を春と夏の2回実施し、どちらも、昨夏に刊行された「技術・家庭科ものづくり大全」の中の授業実践をもとに研究会のテーマを設定する。春の研究会は3月26日(土)に東京の和光中学校を会場に、夏の研究会は8月5日(金)、6日(土)に、それぞれ実施するというところで準備を進める。なお、夏の研究会の会場については、現在検討中である。

研究会の日程・会場を上記のように決めて開催準備を進めることにはしたものの、新型コロナウイルスの感染状況の変化によっては日程や会場の再検討を余儀なくされるかもしれませんし、開催そのものを中止せざるを得なくなるかもしれません。このあたりは流動的に考えたいと思います。また、コロナ禍であることを考慮し、研究会はオンライン形式を併用する予定です。

竹トンボと小刀

東久留米市竹とんぼ協会会長
国際竹とんぼ協会会員

奥住 實

…1 竹トンボとの出会い

1981(昭和56)年、筆者(写真1)が42歳のとき、消防団をやめて東久留米市立第十小学校のPTA役員になった。そのとき、図工担当の山本隆一教諭が竹トンボの製作を



写真1 筆者

していた。その当時の学校管理者は中村春男校長だった。学校裁量の時間を使って、「巧みの手を育てる」というテーマの授業をしており、そのひとつに竹トンボ作りがあった。竹トンボ競技会の初参加は第4回鹿児島(宮之城)大会で、この競技会の高度部門で優勝、2位は山本隆一教諭だった。この競技会の第1回(1979年)と第2回(1980年)は新潟県佐渡島で行われた。この大会で山本教諭は三位に入賞し、このことが第3回大会(1981年)を東京で行うきっかけ

となった。場所は東久留米市立第十小学校であった。この大会では、筆者の師匠である山本教諭が活躍し、2種目を優勝する輝かしい成果を収めた。そして、十小の児童も、大人に負けず、好成績を収めた。

この競技会の競技のひとつに、キャッチ竹トンボがある。キャッチボールのように、二人一組で竹トンボをボールのように飛ばす。最初は、二人の距離は3mから始める。竹トンボを飛ばし、受け取れなかったら失格となる。決着がつかないときは、距離を4m、5mに離して勝負をする。こうして、竹トンボを通じて子どもたちの巧みの手を育てた。

…2 第十小学校と関わった40年を振り返る

この学校では、「巧みの手を育てる」という大きなテーマのもと、「特色ある学校」づくりがなされており、次の事柄が学校裁量の時間に実施されていた。焼き物(土器)



写真2 筆者の作品(竹トンボ)

作り、カイコの飼育と生糸作り、和紙作り、わら細工(草履、草鞋)、竹細工(菜箸、竹トンボ(写真2))、植物栽培(ひまわり、朝顔、小麦、イネ)、小刀による鉛筆削りなどである。特に、竹トンボは、児童・生徒主導で、全校集会や授業の一環として現在も続いている。

東久留米市竹トンボ協会(以下、協会)が創立されたのが1981年で、協会誕生時のメンバーは保護者、

十小の教員、用務員などであった。協会の目的は、「竹トンボの魅力を伝える。愛好者たちが集い、モノづくりの楽しさを通じて社会貢献をする」ことであった。

十小の一大イベントの「竹の子まつり」に筆者がオブザーバーとして参加し、大人のプロっぽいところを見てもらう。また、地域人としても参加し、児童と交流する。十小の児童は各自道具箱を持っており、学校の雰囲気もその学期は竹トンボ一色に染まるほどである。

夏休み後の2学期になると、「竹の子まつり」に向けて、1,2年生は紙トンボ、3,4年生は竹トンボの基本型作り、5,6年生は自分用の竹トンボの新型と1,2年生プレゼント用の基本型・改良型を作ることが役割である。また、1,2年生は、翌年の十小入学予定者を当日に招待する。紙トンボ(ストローと厚紙の方眼紙で作る)をプレゼント用に使っている。

上記のような取り組みが開校当時から続けられている。協会としては、マンネリ化を防ぐため、1986(昭和61)年頃、子どもが驚くような仕掛けをしようと、巨大トンボの製作を考えた。翼長180cm、軸長180cm のものを5人の大人で飛行させるという代物である。他のメンバーとしては、「そんなものは飛ぶはずもないから、もっと小さなものを作ろう」という声が多数であった。筆者は不可能なものに挑戦する気持ちで作った。「竹の子まつり」当日の朝も、テスト飛行を30回くらい行ったが、飛ばない。翼の迎え角をいろいろ変えて試したが、やはり飛ばなかった。学校は筆者の自宅と目と鼻の先にあるので、校内放送がよく聞こえ、我々の出番が迫ってくるのがよくわかる。やむなく、テストで飛ばなかった巨大トンボを担いで学校へ持って行った。本番では3回試みたが、飛ばなかった。そこで、「次を最後の1回にする。それぞれ自分が飛ぶようなつもりで力いっぱいロープを引いてください」とメンバーに指示した。この最後の1回が見事に校舎の2階まで飛び、十小の教員・児童全員がどよめいた。

巨大トンボの第一号機は一度しか飛ばなかったが、いろいろなデータを残してくれた。二号機は50%以上飛行するように作ろうと、図面をひいて製作した。ほぼ100%飛ぶ機体ができ、何度も破損するまで、十小の本番に参加した。それ以後も、竹トンボ製作の指導を40年くらい続けてきた。

さらに、十小とは無関係なところで、巨大トンボ作りでTV番組、全国大会の「にぎやかし」、徳島県小松島市の祝賀行事の記念事業として、世界最大と銘打った翼長が230cmの巨大トンボを納める注文があって、同市にメンバー6人が招待された。そして、飛行後に納入した。

…3 刃物とその扱い方

ボンナイフ(写真3)は商標登録名である。この語源は未調査だが、フランス語の「ボン」は「よい」という意味である。ここからか? 大塚食品の「ボンカレー」の「ボン」は「おいしい」ということらしい。



写真3 ボンナイフ

ところで、ボンナイフのことで事件があった。1960(昭和35)年、このナイフを持った少年が殺人事件を起こして社会問題になった。これがキッカケになって、子どもにナイフを持たせないようになった。「ボンナイフ」は「ミッキーナイフ」とも言った。筆者が万能道具として、子どもの頃から代表的に使用していたのが肥後守(写真4)である。これは、簡易折りたたみ式刃物(ナイフ)である。



写真4 肥後の守

この形状のナイフの製造が始まったのは1890年代である。単純な構造のため、安価に製造でき、ほとんど壊れる箇所がない(部品が少ない)ため、長く使用できる。鉛筆を削ったり竹トンボなどの玩具を作ったりする道具として子どもにも行き渡る。1950年頃に最盛期を迎えるが、やがて鉛筆削り器やカッターナイフの普及に加え、浅沼稻次郎暗殺事件をきっかけに全国に広がったとされる。

「刃物を持たない運動」などに押され、徐々に姿を消した。一方、まれな例ではあるが、刃物の扱い方の学習のため、敢えて全校児童に肥後守を持たせ、鉛筆を削る際などに使用することを奨励している小学校も存在する。また、近年は団塊世代を中心に静かなブームとなっており、熱心な愛好者やコレクターも存在する。

肥後守全盛期の昭和30年代、兵庫県三木市には肥後守を製造する鍛冶屋が多数存在し、三木市立金物資料館には同市でかつて製造された肥後守が多く展示され、往時のブームを伝えている。また、他の地域でも同様の意匠を持つフォールディングナイフが製造され、類似の商品名で流通したが、商品名としての肥後守が大変有名であったため、実態はこの形状のナイフの一般名詞として肥後守が使用されている状況である。

竹トンボを削る道具としては、切り出し小刀がよい。切り出しナイフとも言い、片刃の刃物の一種である。カッターナイフや鉛筆削り器が普及する前は、普通の家庭で日常的によく使われていた。硬質の木材の彫刻などに適していることから、仏師小刀とも呼ばれる。

刃物は危ないので、学校での使用を禁止することが少なくない。しかし、正しい使い方を子どもたちに教えると、指などを傷つけることは防ぐことができる。問題なのは、いい加減に教えないことである。

小刀の使い方は次のようである。まず、持ち方は、利き手で切出し、できるだけ刃に近いところを持つ。親指を長く伸ばし、刃の峰(背の部分)を押さえ(写真5)、削る材料に刃を立てて切り込み、刃を平らにして、薄く剥がすように滑らせる。もう一方

の手で削る木材を押さえ、削る切出しまたは小刀の峰に指を持っていき、親指で峰を押しながら木材を少しずつ削る。

「切出し」や「小刀」のよさは、刃が厚いため、利き手で切りやすい刃先の角度を変えたり、木材を削る角度を調整できることである。また、刃に厚さがあるため、刃先の力が強く、木材の曲線削りやスライドさせての平面削りなどに使うことができる(写真6)。

…4 刃物は身近な道具のひとつ

一般的には、刃物は「危ない」「危険なもの」と言われている。しかし、刃物は日常生活に欠かせない身近な道具のひとつである。筆者は、長年、竹トンボ作りの指導をしてきた。指導のはじめには、「刃物」は危ない代物であるという「ぬれぎぬ」をはらすための話をするにしている。

危ないのは、刃物を使う「人の心」だと言うことである。

筆者が長年、関わっている東久留米市立第十小学校では、児童がそれぞれマイ刃物を持ち、総合学習で竹トンボ作りを基本型から学ぶ。上級生は新型へと進む。ともに正しい刃物の使い方でもっとも大切なのは、人に「ケガ」をさせないことだという指導をしている。

先生方には、異動つまり転勤がある。はじめてこの小学校に赴任してきた先生は、刃物を使用している児童の光景を見て驚く。校長をはじめとして、教員や保護者は、刃物に対する正しい使い方の認識を共有している。児童が多少の切り傷をすることはあるが、その痛みは他に代えがたい学習と信じている。「己をつねって、人の痛みを知れ」ということである。何でも都合の悪いことは、人に責任を転嫁してしまう風潮はなげかわしいことである。自己の責任は何なのかを認識することが重要かと思う。



写真5 小刀の持ち方



写真6 小刀での削り方

産教連の思い出

—雑誌の編集とドイツ民主共和国の教育視察—

愛知県立大学名誉教授

清原 みさ子

私は産教連の会員ではありませんが、父(清原道壽)の関係で、産教連に関わりがありました。関わりの思い出は二つあり、一つは雑誌の編集、一つはドイツ民主共和国(当時、東ドイツ)への総合技術教育視察です。

もう50年も前になりますが、当時、国土社から出版されていた B5 判の「技術教育」の校正などを大学生・大学院生であった4年間(1969～1973)、手伝いました。姉から引き継いだ仕事でした。原稿が集まらないとペンネームを使って書いたり、長い実践記録が来ると手を入れて短くしたりと、父が苦勞していたことを覚えています。私もいくつか論文を書かせてもらいました。

国土社は日本女子大学の近くにありましたので、学生になりすまして、当時、目白の駅から出ていた女子大のスクールバスを原稿の受け渡しに利用させてもらったこともあります。印刷所は高田馬場にあった厚徳社で、原稿が遅れたときは、期日に間に合わせるため、そこで校正をさせてもらったことも何度かありました。「技術教育」の原稿には図があることが多く、図を縮小して入るようにしたりして、原稿の割り付けも手伝いました。組みあがって数行はみ出したときには縮めたり、ページの半分以上あくときには、空白にしておくわけにもいかず、“埋め草”を作ったりしました。それには「内外教育」の記事をよく使わせてもらいました。決まった行数でまとめる必要があり、この埋め草作りの経験は、研究者として原稿を書くときに役立ちました。私はアルバイト代をいただいていたので、振り返れば、お金をもらいながら勉強させてもらったようなものでした。もっとも、当時は結構大変だと思っていましたが、雑誌を定期的に出すことの大変さがわかる経験でした。

「技術教育」では、原稿料が出ていたのですが、それも父が計算していて、当時のことですから、現金書留にして送るのも手伝っていました。事務局というような体制があったわけではなくて、父が書齋にしていた部屋で“家内手工業的”に作業をしていました。

もう一つの東ドイツの10年制オーバーシューレの総合技術教育視察は、1979年3月に出かけたものです。当時、東ドイツに行くには、事前に全日程を決め、ビザを取得する必要がありました。父が行くはずでしたが、胃潰瘍を患い、急に行けなくなり、視察団長を代わっていただいた保泉信二先生や、父の代わりに妹の夫が参加することになったのですが、ビザの取得などで三浦基弘先生には随分お世話になりました。その前年の夏、観光で東ドイツを回るツアーがあり、父と参加しました。日本からの団体旅行としては、はじめてだったのではないかと思います。そのとき通訳でついでくださった方が、産教連のときも通訳者でした。英語の通訳者が少なかったのだと思い

ます。個人的になりますが、東西ドイツ統一後にもお会いする機会がありました。わかりやすくきれいな英語を話す方でした。後でわかったのですが、父と同年代でした。

オーバーシュレの視察では、学校の工作室での実習や工場での実習を見学しました。学校での様子については、「技術教室」(1979年7月号)に紹介しましたが、担当の先生が誕生日で半日勤務ということで、嬉しそうだったこと(そんな休暇があることに驚きました)、見学者がいたこともあり、ヤスリがけのお手本を熱心にやって見せていたことが印象に残っています。工場での実習では、生徒にマイスターがついて実習させるので手がかかり、生産性からいうとマイスターが生産に従事するほうがあがりますが、生徒が実習を通じて労働への態度・規律を学ぶことに重点があるという話が印象的でした。この実習は男女

同じもので、ヘルメットを着用して女子生徒が機械を操作していたことも印象に残っています。右上の写真(実習していた工場(写真1)と実習生の様子(写真2))はそのときのもので、古いのとデータに取り込むために接写したので、見にくいかと思いますが、雰囲気だけでも感じていただければ幸いです。

父が残した資料は私が整理をしましたが、その中に写真3のような古い冊子(1951年発行)もありました。父も関わっていた職業教育研究会のもので



写真1 実習していた工場



写真2 実習生の様子



写真3 職業教育研究会冊子

小説の中の藁打ちと菰編み

—水上勉『山の暮れに』から—

藤木 勝

■ 農家の仕事—藁打ちと菰編み

秋の農作業が終わると、農家では、冬支度と翌年の作業に備えて、さまざまな仕事^{わら}が待っている。苗床の準備や収穫を終えた田畑の手入れである。それに加えて、稲藁を使った縄^な縋^{こも}いや菰^{むしろ}や筵などの農業用品の準備がある。農家でなくても、公園の松の木^のの保護のために菰を使っている。今や風物詩となっている兼六園などの菰巻きは、越冬の習性を持つマツカレハの幼虫(マツケムシ)を菰(一種のワナ)に誘い込んで、春先に焼いて除去するためだという。その効果には疑問符がついているらしいが、常緑樹の霜害や雪害には役だっているようである¹⁾。

さて、その菰であるが、少し前には、菰巻きの日本酒の4斗樽のなどに本物の菰が巻かれていたが、今ではほとんど見かけなくなった。この主因としては、藁床の畳が手に入りにくくなったのと同様、コンバインの普及がある。

菰や筵(いわゆるゴザ類)がなくても、その代用になる製品は何不自由なく手に入るが、石油化学製品であるため、簡単に処理できないことが課題であろう。藁製品ならば、使えなくなったら田畑にそのまま戻したり燃やしたりして土壌の改良になるのである。

■ 水上勉の小説『山の暮れに』から

たまたまパソコンのデータや本棚の整理をしていたところ、かなり前に読んだ水上勉^{*}の小説『山の暮れに』(集英社文庫 1993)の抜き書きが見つかった。それには、私

* 1919(大正8)～2004(平成16)。福井県生まれ。立命館大学文学部中退。若狭の風土と貧しい少年期の寺修行が、哀感あふれる水上文学の原点となっている。さまざまな職業を経て、1948(昭和23)年、病弱な自らの生活を描いた『フライパンの歌』がベストセラーとなった。1961(昭和36)年、社会派推理小説『雁の寺』が第45回直木賞を受賞、精力的な執筆活動を開始した。著書に『霧と影』『海の牙』『飢餓海峡』などの他、人間の業を描く『越前竹人形』『金閣炎上』などの多彩な著作を残している。

技術・家庭科の教科内容に関連づけることの可能な作品を求めるならば、『父と子』は鍛冶場で働く祖父の焼印作りと〈印にも顔がある〉という話に、誤解によって高校を退学になった子とその父の生き方が重なる旅物語である。『有明物語他10編』には、蚕(天蚕・家蚕)の違いや紬の特徴および糸商人のことなどが詳しい。若狭で小学校の代用教員をしていたこともある水上勉は、その頃のことを題材に『椎の木の暦』『寺泊・わが風車』を書いている。これらには丹波のニッケル鉱山(大江山ニッケル鉱山)のこと、徴用工(創氏改名)のことや疎開生活のことなどが自伝風書かれている。

電源開発(株)の御母衣ダム(日本最初の発電用の本格的なロックフィル式ダムで、1961年完成)と湖底に沈んでしまう桜を守る(移植する)庭師のことを描いた『桜守』もよい。

自身の体験とぴったり結びつく事柄が忠実に書かれていたのである。父と母の違いはあるが、水につけて軟らかくなった藁束を槌で叩いてしなやかにして、縄緬よ（縄を繕る）の用に供する手伝いもした。納屋には縄緬の機械もあったから、多くはこれを使っていたようで、ガラガラという音が聞こえていた。菰編みも父に促されてやったこともあり、敷物はもちろん、苗の霜除けなどの防寒対策に使用した。とにもかくにも、水上勉の『山の暮れに』には、縄緬から菰編みまでが詳しく書かれている。少々長くなるが、分けて紹介したい(部分抜粋)。

縄を緬う

母はよく土間の隅にうめた石の上で藁かたぎを打った。堅木の槌つちを左手で持ち上げ、藁束を右手でくるくるまわしながら、やわらかく打ちこなすのである。母の手にかかると1本の藁束は、みるみるうちに布みたいにやわらかくなった。母はこれを、はじめは足の親指にはさんでないはじめ、あとから新藁を足して、巧妙な合掌動作で縄にした。たまったものはみな尻へしき、うしろでまるい輪にした。

菰編み

母の仕事のもう一つは菰編みだった。これは子供の伊作にもおもしろかった。1本の板に四つの目キズのついたのをふた股の台にわたし、その板の上に新藁を2、3本ずつのせてゆく。一方目キズのついた場所には、よく打ちこなしたやわらかい縄が、母の手かげんではかられて2メートルぐらい、その端にこれも堅木のコロがゆわえてあった。コロには穴があいていてそこに縄のはしが通っていた。穴へ通してから結び目をつくり、縄はそのコロを団子のようにまいてしまっていた。これが四つの目キズのついた場所にわたされてある縄だった。コロの重みで、目キズに喰い込んでいる縄に藁をおき足すと、自然とコロの重みはその藁を編んでゆく。

母は巧妙に四つの目キズをわたした縄のコロを音だてて交互に編んだ。新しい藁は、根の側と、芯の側を交互に編みあわせられ、コロの縄にしめくくられて、すだれになって下へたれた。コロはよく肌をすりあわせて鳴った。カチンコロ、カチンコロと鳴った。(中略) 伊作は、いまも目をつぶると、わきで寝ている藤作兄のいびきのまにまにきこえた母のカチンコロの炭俵や米俵編みの音がよみがえる。
(水上勉著『山の暮れに』集英社文庫, 1993, pp. 240-241)

■ すぐできる菰編み機の製作

水上勉の作品をきっかけに、菰編みの原理に基づいた簡単な敷物を作る教具の製作を思い立った。材料は家にあった雑物の活用である。

①材料

長さ300×幅50×厚さ5mm くらいの板材2枚、一辺5~10mm くらいの角棒(太さをそろえた割り箸でも可能)、たこ糸、古い乾電池

②本体の作り方

1. 図1のように、板材2枚を角棒の両端に挟み、木工用接着剤で接着する。
2. 乾電池に巻きつけたたこ糸をかけるための溝を50mm 間隔で5mm ほどの深さに切り込む。

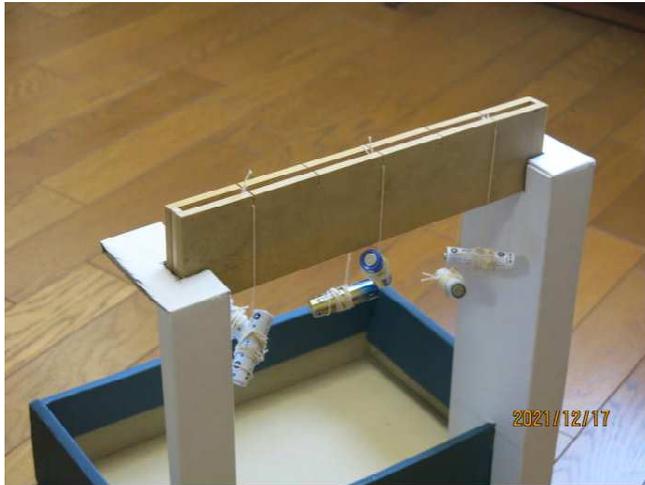


図1

③脚部の作り方

図1の土台と支柱は、じょうぶな段ボール箱の本体と蓋を使用して組み立て式にしたものである。板や二股の枝材を使って本体を支えるようにすれば、本物の菰編み機の雰囲気が出てくる。椅子の背板部分に固定すると、安定した作業ができる。

④たこ糸の巻き方

最初にたこ糸の端を20mm くらいのループ状にして、電池の側面にセロハンテープで固定する。

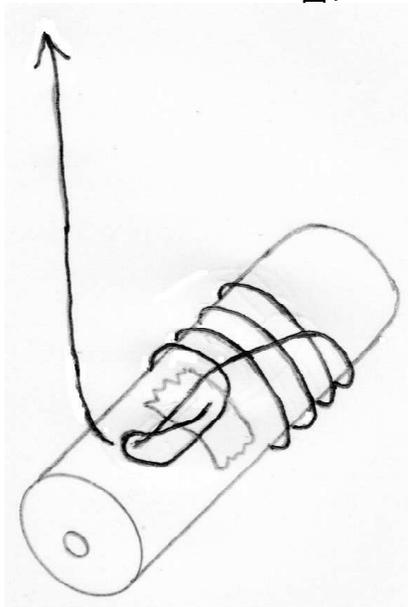


図2

この上に被せるようにたこ糸をぐるぐる巻いて、端は図2のようにループ部分を一回くぐらせ、矢印部分で反対側のたこ糸と結ぶ。編んでいる途中で糸の長さが足りなく(短く)なって作業がやりにくくなったときは、乾電池に巻かれているたこ糸を巻き戻せばよい。

* 乾電池に巻きつけるたこ糸の長さは作る作品の大きさによるが、*作品の長さ+溝の上端から乾電池までの長さ*程度が適当である。

* 大きな物を作りたいときは長い板を用意する。次に示すのは、本体の隙間に入る材料を使用して作った作品例である。板1枚だけでも菰編み機は作ることができるが、その場合は厚い板がよい。(図5²⁾を参照)



図3 ストローを使った敷物

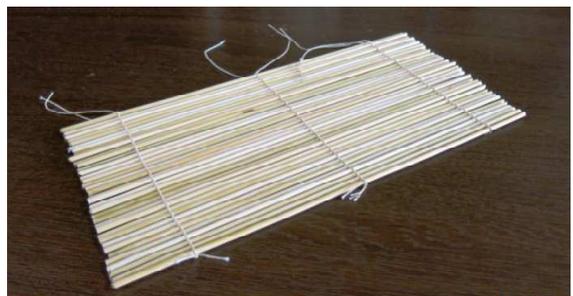


図4 竹ひごを使った敷物
(海苔巻きにも使える)



図5

<参考文献>

- 1) 参考 : <https://dot.asahi.com/tenkijp/suppl/2016112900058.html>
- 2) 出典 : <http://toyokyoudos.cocolog-nifty.com/blog/2017/02/post-d4af.html>
中央市豊富郷土資料館 〒400-1513 山梨県中央市大鳥居1619-1
Tel:055-269-3399 /Fax:055-269-3397
E-mail:ty-shiryoukan@city.chuo.yamanashi.

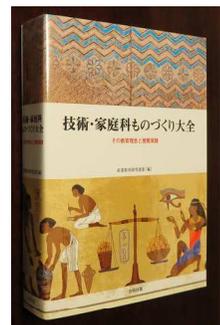
『技術・家庭科ものづくり大全』が刊行されました

昨夏、産教連編による『技術・家庭科ものづくり大全』が合同出版から刊行されました。70年にわたる産教連の研究と実践の集大成ともいべき書籍で、A5判、656ページの大著です。

(定価：本体3000円＋税)

学校現場をはじめ、多くの方々が本書を手にすることを希望しています。

なお、会員の方で本書を購入したい場合には、頒価2500円でお分けしますので、事務局までご連絡ください。(編集部)



■ 菰編みに興味を持ちました

……………2021年12月31日

藤木先生の菰編み(編集部註：本号8ページの報告参照)はおもしろいですね。私も小学生の頃、見様見真似でもできました。麦わらで作った菰は、竹竿に巻いて、干瓢を干すときに使用しました。

倉敷市の水島の石油コンビナートが稼働し始めた1960年代から、農作業に使用する藁製品はビニル製品に変わりました。

マイクロプラスチックの問題を地球上からなくすためにどうするか。それにはプラスチックを作らないことだと思います。では、使わない技術をどうすればよいか。その先に“藁”を使う発想がある気がします。

授業で菰編みをしてみるのもおもしろいと思います。これは次の年の課題です。

~~~~~ オンライン会議用システムを使ってみて ~~~~~

コロナ禍の真っ直中の頃から、オンラインでの会議に参加することが多くなりました。オンライン会議のしくみに詳しい方の手ほどきを受けながら、何とか参加していますが、社会の進歩に遅れないようにするのに苦労しています。

私はオンライン会議用のソフトとしてズームを使っていますが、このソフトをはじめて使ったときには、自分でもわけが分からずにボタンを押していると、いつのまにかできてしまいました。その後は、使い方の分からない部分について、端末のアドバイザーに聞きながらどうにか使えるようになりました。

私の悪い癖というか、何でも調べないと気がすまない性分から、この便利なソフトについて調べてみました。中国生まれのエリック・ヤンがアメリカに渡り、企業向けの Web 会議システムを作り、その後個人向けのものも販売しています。もちろん、中国にもソフト開発会社があります。彼は「アメリカは自由でオープンに会議ができて働きやすい」と言っています。

今は、世界の富が一部の人に集まっている状態で、グローバルに活躍する少数の人と食べることに困っている人の両方がいます。「技術を適用」して、誰でもが食べることが可能な社会の実現について考えていることをもっと発信していきたいと思っています。

(岡山・赤木俊雄)

「知的生産の技術」を読んで思う

たまたま、書店に立ち寄った際、気になる書籍を見つけた。「知的生産の技術」(梅棹忠夫著 岩波新書 1969年)というタイトルの本である。タイトル名から一瞬ものづくりの本を想像してしまった。とりあえず「知的」と「生産の技術」に分けて考えてみた。国語辞典で調べると、「知的」は「知識にかかわる。知性に富んでいる」というような意味で、「生産の技術」は技術・家庭科という教科の「生活に役立つものづくりの手段」と理解した。

この本の著者である梅棹忠夫氏は、「学校では知識を教えてくれるが、知識を獲得する方法はあまり教えてくれない」ので、「調べる、考える、研究する、書く」ための効率の良い方法を紹介している。その方法とは、「見聞きしたことをカードに記入して、規格化された台紙に貼り、情報をまとめる」とのことで、整理・整頓には紙箱を使い、二つ折りの紙でホルダーとファイルを作る方法を自分で工夫されている。

私は、30年前にパソコンを使い始めたとき、「ホルダーやファイル」という名前に馴染めなかったが、その頃にこの本を読んでいたれば、パソコンを「知的生産の技術」の便利な道具として受け入れたかもしれない。また、この本では、次のような問題提起をされている。

- ・文章の問題は、情報工学問題として考えたほうがよいのではないか。
- ・大学でいえば、工学部に情報工学部の学科をつくり、将来の日本文明における知的生産の技術……。

私は、30代の頃、カードを作ったが、まとめて整理し、文章にしたことはなかった。カードはメモとして書いたが、それをどのように活用するか知らなかった。当時はプラスチックの整理箱などはなかったので、木材で多くの道具箱を作った。その習慣で、カードを入れるケースを丁寧に作った。故向山玉雄先生に「カードが傷まないようにどのように保管する工夫をされているのですか」と的外れの質問をしたことがあった。それに対して、向山先生は「B-6 カードに気づいたことをサッと書き、二つ折りにして上着のポケットに入れるだけです」と答えられた。長い教師生活の実践記録や感じたことをカードに書き、まとめて文章化しておけば、産教連ネットに投稿するときに役立ったと思う。

現代のパソコンソフトには「知的生産の技術」に役立つものがあるのだろうが、食わず嫌いで困っている。皆さんはどのように思われているのだろうか。

(岡山・赤木俊雄)

□ 会員からの便りを紹介します—産教連通信第240号(前号)を読んで

産教連通信は前号から年4回の発行に変更になりましたが、その前号を読んでの感想が寄せられていますので、再録してみました。

「技術科・家庭科における学習方法」と題する池上惇氏の論文に目を通しました。池上氏は、その中の「新たな教育の視点—体験学習を基軸とする科目の総合化と教育の機会均等による『スタートラインの平等』」の項で、体験学習を教科と関連づけることができれば、「研究」という貴重な体験を身につけることができると主張されています。その実践例として、岩手県立遠野緑峰高校での、ホップの廃棄物から和紙を生産する技術開発の事例が紹介されていました。その状況をもう少し詳しく知るため、インターネットを利用して調べてみると、この学校には生産技術科（生産科学コースおよび生活文化コース）と情報処理科があることがわかりました。課題研究で、地元で生産されているホップの廃棄物を利用して和紙を作る題材設定が生徒から提案されました。地元農家との連携により、ホップを利用した和紙が製品化され、道の駅で販売されました。また、農業クラブでもその取り組みを発表しています。地元の産物使用の商品化は、農業高校では多くの実践例があります。

池上氏の論文では、もう一つの観点として、デザイン経営を構想できる体験学習、「文化資本論」が紹介されています。これについては難しかったですが、興味を持ちました。
(岡山・赤木俊雄)

前号に目を通しての単純で素朴な感想を記します。後藤直先生の授業実践報告と居川幸三先生の報告には、ここ10年間の教育現場と教育行政の急激なマイナス部分への悩みが書かれているのだと思います。後藤先生は、勤務校が変わると、設備の整備状況(PC 関連機器の押しつけ)によって、指導内容も方法も零からスタートせざるを得ないことがあると述べています。居川先生は、かつては自分たちが苦勞して整え指導に役立ててきた教材や教具が、その意義を知らずか惜しげもなく廃棄されていくことに半ば怒りを感じつつ嘆いています。しかし、お二人とも、後に続く教員のために研修会を組織したり、新しい製作題材の開発などの実践をしていることに改めて感心しています。ところが、現在の私にとっては、たとえてみれば、宇宙の彼方のことがらと大地に立つ自分のことがらと感じられるのです。

特に、勉強していないから当たり前ですが、今の情報教育には頭がついていきません。なるほどそうなのかという部分も少しはあるのですが、「どうしてそのプログラムなのか」という疑問は消えません。片や、大地を踏みしめ、感覚的にも「なるほどね。そうだそうだ」とうなずきながら、居川報告は読むことができました。後藤先生は「勉強している。よく頑張っているなあ」と感心します。その一方で、他の先生方は一体どんなことをどのように指導しているのでしょうか。いずれ、大学入試にも情報が全員に課せられるとかいう話です。大学ではその対応が分かれているようです。私としては、金属・機械・電気といった総合的なものづくりの課題を入試に取り入れ

たほうが、手と頭が働いてよいのではないかと思うのですが。しばしば、情報の学習は「論理的思考力を育てる」とか聞きますが、不可解です。

技術・家庭科で取り上げなければならない情報の内容は何なのか、学習指導要領に盛り込まれた内容といま実際に中学校で行われている指導内容に齟齬はないのか、砂上の楼閣に陥ることはないのか。現在行われている情報教育の内容が義務教育段階の子どもにとってふさわしいのかなどということを改めて考えてみる必要があります。

「情報」が選択領域であった頃に立ち戻り、「今の情報の指導内容の是非を問う」というような議論が再燃するのではないのでしょうか。そして、これから先10年経過しても技術科教育には、加工領域や機械や電気領域の学習がしっかりと根付いていることを期待したいです。実際に教える指導者が納得できることしか、教わる生徒たちにそのおもしろさは伝わらないし、発展性も望めないのですから。 (東京・藤木勝)

~~~~~ メーリングリストの積極的な活用を ~~~~~

会員の皆さん、メーリングリストの産教連ネットを活用していますか。今や、インターネットの利用は当たり前の時代になっています。「最近、図書館でこんな本を見つけましたが、ご存じでしたか?」「こんな情報を入手したのですが、どなたかもっと詳しいことを知りませんか?」などということを産教連ネットへ載せることで、情報交換の輪が広がることもあります。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩となります。この産教連通信でも、随時、産教連ネットへ発信された情報を編集し直して紹介しています。本号にも「会員からの便りを紹介します」というタイトルで掲載していますので、参考にしてみてください。

産教連ネットへの登録に関しては、まずは事務局(最終ページに連絡先記載)へご連絡ください。

□ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をどしどしお寄せください。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。お待ちしております。

さて、コロナ禍のなか、昨夏に実施した連盟総会で、今後の活動規模を縮小することが決まり、早速実行に移されています。皆さんがご覧になられているこの産教連通信も、1月、4月、7月、10月の年4回の発行に変更されています。

なお、人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、ご面倒でも、すみやかに事務局までご連絡ください。また、メールアドレスの変更についても、同様に連絡をお願いします。

編集後記

コロナ禍のなか、新年を迎えました。昨年(2021年)を振り返ってみると、さまざまな意見があった東京オリンピックが、緊急事態宣言下、無観客で実施された一方、産教連主催の全国大会は実施できませんでした。今年こそは開催をと思っていましたが、コロナウィルスの変異株が世界各地で猛威をふるい始め、見通しがつかなくなってきました。

そのようななか、新年早々に常任委員会を開催し、今夏の大会(研究会)の実施形態をはじめとして、活動計画を中心に検討しました。その結果、冒頭ページに記載したような形で準備を進めることにしました。研究会が中止に追い込まれることがないように祈らずにはられません。

なお、現在連載中のシリーズ「学校現場はいま」は休載とさせていただきます。
(金子政彦)

産教連通信 No.60 (通巻 No.241)

2022年1月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13
☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21
☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部